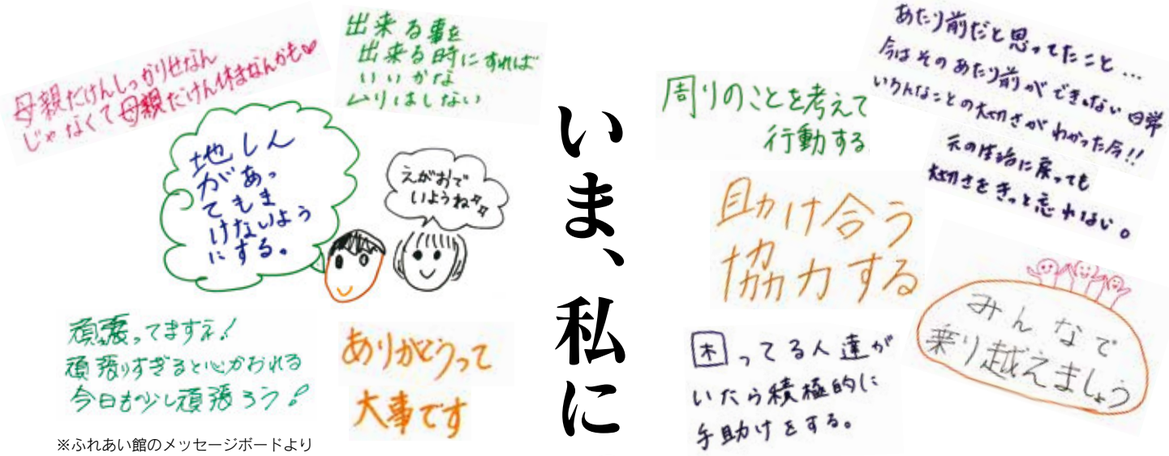
いま、私にできること

熊本地震から1カ月以上が経った。日常が戻ったようにも見えるが、まだ復旧のめどが立たない家屋や施設も多い。家屋の倒壊や余震への恐れから、今も避難所生活を続ける人もいる。市内のり災証明書交付申請は、5月26日時点で4、337件にのぼった。そのうち、被害認定調査で確認できただけで全壊が20件、大規模半壊が32件、半壊が262件となったが、今後の調査でさらに増えると予想される。



※ふれあい館のメッセージボードより

その一方で、発災以降、さまざまな支援が私たちを支えてくれた。全国の自衛隊や医療チーム、地元消防団や民間事業者、支援物資を送ってくれた数々の団体・個人―。

そしてもう一つ。変わり果てたまちの姿に心を痛め、「何かできることはないか」と動き出したボランティアの存在があった。自らも被災しながら、一人一人が自分にできることを考え、まちの復興に向けて一歩を踏み出した。

子どもたちがサッカーを楽しめる環境を取り戻したい

地震による休校のあいだ、「地元の復旧のため、自分たちにできることを」と集まった西合志南中出身の高校生たち。志村直樹さん（みずき台）がツイッターで友人らに呼び掛け、保護者・学校・市の承諾を得て活動を始めた。がれきの仮置き場となったみずき台グラウンドで、車の誘導やがれきの搬入・分類などを毎日手伝った。

「ここは、普段は子どもたちがサッカーを楽しむ場所。早く元の環境に戻ってほしい」という思いも込められていた。

仲間と家具の搬入を手伝う志村さん（左）

コミュニティセンターで地域住民が支え合い

すずかけ台自治会が、すずかけ台みどり公園と公園内のコミュニティセンターを避難所として自主的に開放。松﨑和寛区長と役員の門垣紀博さん、園田幸功さんらは、毎晩、夕方から増える避難車の交通整理を行なった。多い日で約100人が避難、公園内の車は300台（車中泊含む）を超え、不安で自宅にいられない住民などが身を寄せた。また、夜に「ただいま」と戻ってくる人もおり、住民が何気ない会話を交わす交流の場にもなった。

松﨑区長の姿にホッとした表情の避難者

新鮮野菜に温かい炊き出し元気市で笑顔を発信

レストラン・すみっこの台所の皆さんを中心に、元気の森公園で毎月開催している元気市。本震から約1週間後、「みんなで元気を出そう」と開催され、地元農家から提供された合志産の新鮮野菜や草花の販売、温かいすいとんの炊き出しなどが行なわれた。

元気市を訪れた人は、地震の影響で品薄になった野菜を買い求めるだけでなく、ご近所さんや農家の皆さんと笑顔で会話を弾ませた。

買い物とおしゃべり。みんな自然と笑顔になった

地域みんなで元気になろうぽっかぽかフェスタ

地域づくり団体・ぽっかぽか杉並台が開催したぽっかぽかフェスタ。「被災してもふさぎ込んでばかりはいられない」「みんなに元気を取り戻してほしい」と、以前から予定していた行事を復興イベントに替えて実施された。カレーや焼き鳥、かき氷などを販売し、子どもから高齢者まで幅広い年代の住民が参加。生バンドが登場すると、みんなで懐かしの歌を合唱し、和やかなひとときを過ごした。

生バンドの軽妙なトークで会場は笑いに包まれた

避難所の子どもたちに笑顔を博多からたこ焼きの炊き出し

博多区でたこ焼き店を営む中川雄介さんらは、須屋市民センターと泉ヶ丘市民センターでたこ焼きの炊き出しを実施。地震のニュースを見てすぐに材料を手配し、交通渋滞をくぐり抜けて3人で熊本に駆け付けた。

「避難所の子どもたちに笑顔になってほしい」中川さんらの願いどおり、あつあつのたこ焼きを笑顔でほおばる子どもたち。お母さん・おばあちゃん世代もイケメンの登場に「目の保養」と表情を和ませた。

温かいたこ焼きに大満足の子どもたち

商業再建の足掛かりに御代志のヤミ市で復興支援

御代志駅近くの三角地で行なわれた復興ヤミ市。須屋の居酒屋阿呆鳥の店主・福田和憲さんがフェイスブックなどで呼びかけて開催した。市内外から飲食店などの約20事業者が出店し、から揚げ、焼き鳥、かき氷、焼酎、雑貨などを販売。

建物の被災で立ち退きを余儀なくされ、空きテナントにも入れず厳しい状況の店も少なくない。まちの活性化に大きく関わる飲食店や商店。事業者の収入確保と商業復興も今後の課題の一つ。

青空の下で多くの家族連れがイベントを楽しんだ